

中野孝次

人生のこみち

中野孝次

人生のこしみち

文藝春秋

人生のこみち

一九九五年七月十五日 第一刷
一九九五年八月二十日 第三刷

定価はカヴァーに表示してあります

著者 中野孝次

発行者 湯川豊

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 精興社
製本 矢嶋製本

© Koji Nakano 1995 Printed in Japan
ISBN 4-16-350390-0

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取
替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

まえがき

文藝春秋の雑誌「ノーサイド」に一九九三年三月号から「老いの小径」と題して連載中の文章のうち、とりあえず二十六回分をここにまとめた。

わたしもいろんな種類の雑誌に連載したことがあるが、この「ノーサイド」の連載くらい毎回書くのがたのしい連載はしたことがなかった。それだけつまり気軽に書けたということだが、それというのも、わたしも今やその一人になった老人の生存感覚ないし日常の意識をあるがままに正直に書くという趣旨が、よほど今のわたしに合っていて、書きたいことが次から次へ湧いて来たためであらうと思う。物書きにとってこんなことは本当に珍しいのである。書くということは大抵は尋常一様でない苦しみをともなうもので、それを乗越えずには

書けないものだが、この連載のように生みの苦しみもなくたのしく書けたのでは何やら申し訳ないようである。

それだけにしかし、ここには肩肘を張らぬありのままの一老人の生活と意見がわりと正直に出ているのではないか、と自分ではうぬぼれている。

ここにあるのは正確に七十歳になった現在のわたしの人生および老いにたいする考えであって、わたしという人間はこれ以上でもこれ以下でもない。死と墓については第二章のように考え、老年の性については第一章のように考えている、等々。全部これが今のわたしの意見で、だからすらすら書けたのだろうと思う。従ってこれ以上内容について前宣伝する必要はないのだが、インパール作戦で死んだ兄の話（第十九章）の後日譚だけはその後の成行きを報告しておかねばならない。

結局、兄の名を記した日章旗は、その後関係者の考えを煮つめあった結果、わたしの兄のものであるという確証はないものの蓋然性は非常に高いということになり、一九九五年一月二六日、江東区のホテルで、区役所の人、オーストラリア・ゴスフォード市から日章旗を持参された松平ミナさん、日章旗に字を

書いた茗荷中將の息子さん、われわれ夫婦が集まった席で、わたしが受け取ったのであった。わたしとて確証はないが、誰のものであれ五十年間この旗ともにふらついていた兵の魂のためにも、わたしが今受け取って魂鎮めをすべきだと思ったからであった。旗は練絹地だが五十年間に色褪せ、見るだけで胸が迫った。

その後さらにビルマまで戦死者慰霊の旅に出かけられた遺族の方から、現地の土をも記念にいただいた。兵達が次々と死んでいった道は「白骨街道」として今に残っているというのも無残な話であった。

考えてみれば戦後も五十年、あの戦争で死んだ兵達の記憶も薄れてきているのだが、ときとして死者はこうして呼びかけてくるのだ、とわたしは兄の日章旗出現で思った。

が、死んだ兵ばかりではない。わたしの世代は戦争中二十歳で死ぬものと覚悟し、二十歳から先の生を考えることができなかつたのにたまたま生き延びることを得て、戦後五十年日本の復興と経済的成功とを見て来た。自分たちも懸命にその経済的復興のために働いてきたのだが、それが実現した今の日本にま

で生き延びてあまり生の充実感をもてないでいるのである。この五十年間のやみくもな技術と経済の発展ははたしてこれでよかったのか、の疑問にとらわれているのである。要するにあまりこの成功に満足することができないのである。

これはそういう、一身にして二世を生きたような世代の一人の老人の、今の日本を生きている日々の感慨である。話に多少の苦味が生じるのは致し方ないとせねばなるまい。ここに載せた二十六章はそんな老人の今の日本に対する希望と注文と見てもらいたい。

一九九五年六月

中野孝次

人生のこみち * 目次

一	老いと性	11
二	墓について	20
三	六十の手習い	29
四	また山歩きをしてみても	38
五	碁が一番	48
六	帽子の話	57
七	禁煙自慢話	66
八	下駄とわらぞうり	75
九	形見分け	84
十	日本酒	93

十一	人生の長さ、あるいは、短さについて	103
十二	わが生存計画と犬	113
十三	江戸養生訓の教え	123
十四	老人性搔痒症	133
十五	花見	143
十六	葬式	153
十七	アイルランドの魅力	162
十八	昔の仲間は良き哉	172
十九	五十年目の日章旗	182
二十	普請中	192

二十一	老境の価値について	202
二十二	気のすすまぬことはやらぬだけ	213
二十三	死ぬ時節には死ぬがよろしく候	223
二十四	理想の寝具	232
二十五	ライカ礼讃	241
二十六	遊戯の人、良寛	251

人生のこみち

装丁・題字 田村義也

写真 世界文化フォト

一 老いと性

老人の性というのは微妙な問題だ。枯れはたとえ言いきれず、中には現役のままのもいたりして千差万別、一概に論じられないのである。デカルトは『方法序説』の冒頭で、

「この世で最も公平に配分されているもの、それは良識ボンサンスだ」

と言っている。わたしは若い頃これを読んで強い印象を受けたからいまだに覚えているが、この伝で性のことを言えば、

「この世で最も公平に配分されていないもの、それは性の能力だ」

と言えるかもしれない。実際、性の能力ほど人によって違うものはなく、その差は老いてますます大きくなるようだからだ。

先日、杉浦明平さんの随筆集『偽「最後の晩餐」』を読んでいたら、次のような記述に出

会ってわたしは瞠目した。

電力の鬼と呼ばれた松永安左エ門は、八十歳を過ぎても毎晩左右に若い美女を擁して寝る習慣を崩さなかったというが、陶芸家の加藤唐九郎はこの人に、

「加藤君、七十過ぎたら女は二人に絞れよ。さもないと、えらくしんどいぞ」

と言われ、

「たしかにあれは真理だった」

と述懐して、その遺訓を拳々服膺したというのである。つまり七十を過ぎてからも常に女性二人だけは擁していたわけだ。

そして八十五か六の齡としに前立腺を手術したあと、心配だから早速試してみたというので杉浦さんが「結果はどうでした」と訊ねると、「大丈夫じゃ、前と変りはなかったよ」と阿々大笑したという。

世の中にはこういう化物みたいな人もいるのだから、五十代半ばから枯泉の状態になつたわたしなどは、天の配分は不公平なる哉かな、と眩かずにいられないのだ。

わたしの五歳年上の友人も、昨年春に心臓の大手術をしたあと夏ごろ会うと、「早速試運転してみたが、大丈夫だった」と嘯うそぶいてわたしを驚倒させたものである。こういう人間は

たしかに在るのだ。蓮如上人は八十何歳かで子を作ったという伝説を、だからわたしは信じる。

ことほどさように人によって能力に大きな違いの出てくるのが、老人の性なのである。若い時はだれも人並に性欲を持て余しているから目立たないが（それでもその頃から違いはあるのだが）、^{とし}齡をとると俄かにその差が目立ってくる。

性生活が夫婦に限られているふつうの人間の場合は、^{とし}齡をとってくれば自然にそれの止む時が来る。そして大抵の人の場合はそれが同時に性活動そのものの停止の時期と重なるのだらうと思う。が、一部の人間は、これは生れつきその欲望が^{さか}旺んだからそうするのか、使いこんでいるからますます能力が磨かれてそうするのかわからないが、いわゆる女遊びをする。そしてこういう人間に限って、不公平なことに、いつまでたっても性能力が衰えないらしいのである。先に言ったわたしの五歳年上の友人も、若い時に細君に先立たれて、以来ずっとさまざまな相手と旺んな活動をつづけて来た人物なのであった。

わたしなぞはその方面の興味も関心も比較的淡泊であったから、特別その道に励むということもなく、自然に任せているうち早々と止んでしまった。だから、時としてそういう歴然たる能力の差を見せつけられるとそのたびに不公平なる哉と呟かずにいられないけれ

ども、しかしそうだからと言ってそういう人たちを羨む気も起きず、わが身の衰えを歎く気もあまり起きないのである。それは自分にはそんな活動を維持する自信も気力もないこともあるが、それより先にいつまでもそういう生臭い男女の仲を保つ面倒のほうをまず想像してしまう。性をふくむそういう人間関係は、考えるだけでもうんざりで、そのために若い頃から励まなかったようなもの、つまり自業自得だからである。

それを思えば、天は必ずしも不公平だとは言えないのかもしれない。なるほど先天的な能力の配分は千差万別のようにだけれども、その維持、つまり後天的な努力のほうは、好きな人間は面倒を嫌わずに励むし、その面倒の嫌いな者は早々と衰えてしまうのだからその点では天は公平だと申すべきなのだろう。人間の能力すべてについて言えることだろうが、使えばその能力は維持され、使わなければたちまち衰えてしまうという原則は、性に關してとくに当てはまるようである。とすれば、使わず磨かなかった人間がその衰えについてとやかく不平を言うべきではない。

しかし世の中には性能力の衰えを自覚しながらなんとかしてそれを阻止しようと願う人も出てくるわけで、その場合にはいささか滑稽な結果が生じる。

わたしが同年輩、年上、年下の老人たちに一番多く接するのは碁会所だが、わたしの通